八幡沖遺跡第７次調査

１　調査要項

所 在 地　多賀城市宮内一丁目地内

調査原因　宮内地区被災市街地復興土地区画整理事業

調査面積　約 3,600 ㎡（調査予定面積 約 6,700 ㎡）

調査期間　平成 26 年５月８日～ 12 月末頃（第１期分）

調査協力　宮城県教育庁文化財保護課（自治法派遣職員：長野県、奈良県、山口県）、東北歴史博物館、
東北大学総合学術博物館准教授 佐々木理氏、東北学院大学教授 松本秀明氏、
独立行政法人産業技術総合研究所

第１図　八幡沖遺跡と周辺の遺跡

２　調査の経緯

本遺跡は、本市南部の宮内地区に位置しており、その範囲は八幡神社（はちまんじんじゃ）の境内を含む南北約 370 m、東西約 200 mの範囲におよんでいます。東日本大震災による津波被害の大きかった宮内地区は、市街地の復興を図るため宮内地区被災市街地復興土地区画整理事業が行われることとなりました。今回の発掘調査は、区画整理による工事によって遺跡の一部が壊されることから、あらかじめ記録を行うことで、貴重な文化遺産を後世に伝えようとするものです。なお、震災復興事業として、早期完成が望まれることから、破壊されない部分は必要最小限の調査にとどめるとともに、宮城県の協力を得ながら、工事計画に遅れがでないよう実施しています。

写真１　八幡沖遺跡全景（南から）

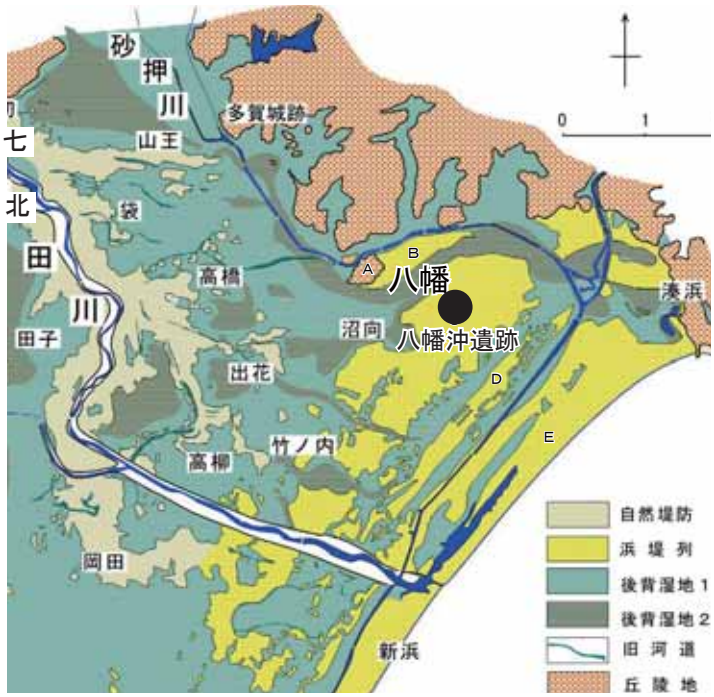
３　遺跡の概要と八幡神社について

本遺跡は過去に７回（多賀城市教育委員会実施：６回、宮城県教育庁文化財保護課実施：１回）の発掘調査が行われており、古墳時代後期から平安時代までの遺構と遺物を発見しています。特に神社周辺においては、10 ～ 12 世紀頃の土器が多く出土することなどがわかっていましたが、具体的な性格等は不明のままでした。

八幡神社については、安永（あんえい）３年（1774 年）の『風土記御用書出（ふどきごようかきだし）』に由来の一部が伝えられています。それによると建保（けんぽう）年中（1213 ～ 1218）に平右馬助（たいらのうまのすけ）が古舘（ふるだて）（現在の八幡館跡（やわたたてあと））に居館を定めたため、当初その場所にあった神社を宮内に移したとされています。

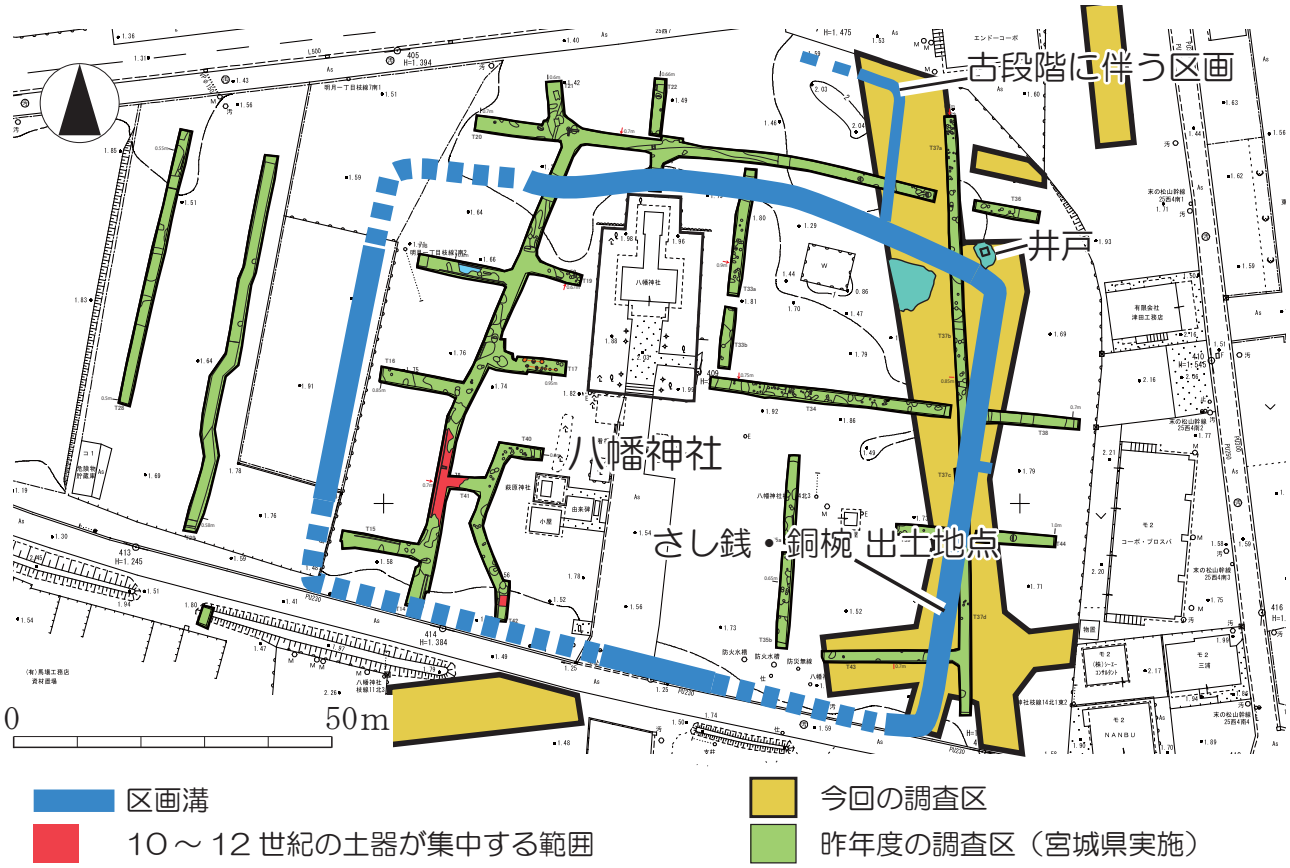
４　地理的環境

本遺跡は、海岸線に沿って約 5,000 年前に形成された浜堤（ひんてい）に立地しています（第２図）。現地表の標高は 1.4 ～ 1.8 m で、およそ平坦ですが、神社境内がやや高く、南に向かって徐々に低くなっています。試掘調査では遺跡の西隣と南隣は、沼地のような低い土地であったことを確認しており、遺跡はその際までひろがると推定されます。なお、遺跡の西隣は祓沼（はらいぬま）という小字があり、かつてはそう呼ばれる沼があったと伝えられています。



第２図　八幡沖遺跡周辺の地形

図面提供　東北学院大学 松本秀明氏



第３図　神社周辺の調査平面図

５　調査成果

（１）区画溝の調査（第３・４図、写真２～５）

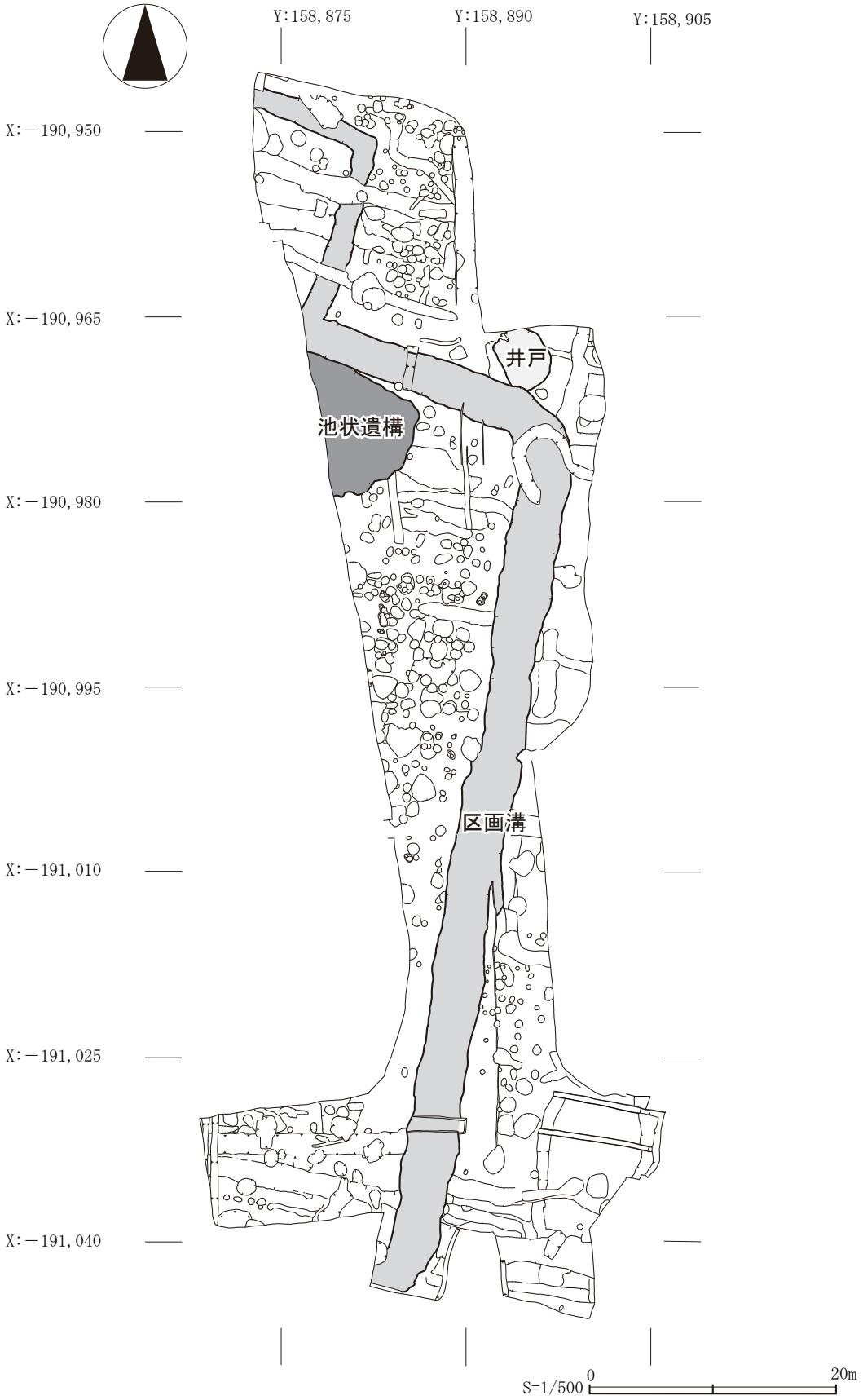
神社東側にあたる１区において南北約 72 mにわたって発見した護岸施設等をもたない素掘りの溝です。池状遺構よりも古く、調査区北東で発見した井戸を含むそれ以外の遺構よりも新しい溝です。規模は幅３～４m、深さ約１mあります。南北の２箇所で西へ曲がることを確認したことから、この溝が敷地の東側を区画する溝と推定されます。西側を区画する溝については未発見ですが、未調査の範囲に存在すると思われることから、南北約 72 m、東西約 100 mの範囲を区画していると推定されます。４時期の変遷（A→D期）があり、このうちC期にはさらに北に張り出す別の区画を持つことから、時期によって区画の変化があったことがうかがわれます。

写真２　八幡沖遺跡の空中写真

写真３　神社東側で発見した区画溝（南東上空から）

写真４　神社東側で発見した区画溝（南から）

写真５　１区　遺構平面図


Y:158,875
Y:158,890
Y:158,905
X:－190,950
X:－190,965
X:－190,980
X:－190,995
X:－191,010
X:－191,025
X:－191,040
井戸
池状遺構
区画溝
S=1/500
0
20m

第４図　１区　遺構平面図

遺物は、さし銭（写真６・８）や木製品（舟形・漆器椀）、銅椀（写真７）、17 世紀末頃の陶器（すり鉢）のほか、10 ～ 12 世紀頃の土器が多量に出土しています。

さし銭は、Ｃ期埋土から出土しました。39 枚確認できましたが、サビによって銭貨同士が密着していることから、現状では１枚を除き銭文を確認できませんでした。そこで、内部に隠れた銭文を確認するため、非破壊によるＸ線ＣＴ撮影を試みたところ、一部の種類を確認することができました（写真８　表１）。

（２）江戸時代の建物の調査（写真９）

神社の南側約 100 ｍの位置で建物や土壙を発見しました。第３次調査で発見した建物跡と一連のものと推定され、建物は調査区を超えて東西にのびています。この建物については、これまでの調査で灰白色火山灰との関係から 10 世紀前葉以降の古代の建物と考えられていたものです。今回の調査で発見した一部の柱穴に、柱材が残っており、これを用いて放射性炭素年代測定を行ったところ、18 世紀初頭（西暦 1700 年代はじめ）以降の建物であることが新たに明らかとなりました。

（３）遺構外の出土遺物（写真 10）

土師器や須恵器、須恵系土器、瓦、かわらけ、無釉陶器などが出土しています。

出土量が最も多いものが、須恵系土器とかわらけで、土師器や須恵器、瓦、無釉陶器の割合は極めて少量です。

形がわかるもののうち須恵系土器では坏や高台付坏が、かわらけでは小皿や柱状高台があります。かわらけのほとんどがロクロでつくられたもので、このうち柱状高台は高台部分約５㎝と高く末広がりのものが 10 点ほど出土しています。かわらけは、この柱状高台の年代からおよそ 12 世紀前半を中心とした年代が推定されます。

なお 12 世紀前半頃の遺構はまだ発見できていませんが、平成 25 年度に実施した試掘調査では、神社の西側でこの時期の土器が密集して出土する場所があることから、その周辺にこの時期の遺構があった可能性が考えられます。

写真６　さし銭出土状況

写真７　銅椀出土状況

６　まとめ

（１）区画溝の年代

区画溝については、Ａ期の上層から 17 世紀末頃のすり鉢が出土していることから、およそこの頃には埋まっていたと思われます。また、Ｃ期から出土したさし銭は、最も新しいものが永楽通寶（初鋳年：1408 年　写真８　表１）であったことから、およそ 15 世紀～ 17 世紀末頃

写真８　さし銭のＸ線ＣＴ画像
画像提供　東北大学総合学術博物館

銭貨名	初鋳年	枚数
開元通寶（かいげんつうほう）	621年	2
天聖元寶（てんせいげんぽう）	1023年	1
皇宋通寶（こうそうつうほう）	1038年	1
治平元寶（じへいげんぽう）	1064年	1
元豊通寶（げんぽうつうほう）	1078年	1
大定通寶（だいてつうほう）	1178年	1
紹熙元寶（しょうきげんぽう）	1190年	1
至元通寶（しげんつうほう）	1285年	1
天元通寶（てんげんつうほう）	1360年頃	1
永楽通寶（えいらくつうほう）	1408年	2
調査済		12
未調査		27
合計		39

表１　さし銭の種類一覧

の年代が推定されます。なお、区画溝より古いとみられる井戸に組まれていた井戸枠を用いて年代測定を行ったところ 14 世紀を中心とする年代であったことから、これと矛盾しない結果といえます。

（２）区画溝の性格について

性格をはっきり示すものは確認できていませんが、調査成果を踏まえると次のことが指摘できます。

①明治９年の絵図に描かれた八幡神社をみると、東側と南側の境界は今回発見した区画溝におよそ重なる位置にあること。

②区画溝などの遺構がある一方で、遺物の量が極端に少ないことから、この場所が生活空間とは異なる場所と推測されること。

このことから、今回発見した区画溝は中世から近世にかけて八幡神社を区画していた可能性が考えられます。

写真９　近世の掘立柱建物跡（西から）

写真 10 出土した多量の土器

山王遺跡第１４２・１４３次調査

１　調査要項

所 在 地　　多賀城市山王四区（第 142 次）・山王字西町浦（第 143 次）

調査理由　　宅地造成（第 142 次／復興事業）、個人住宅建設（第 143 次）

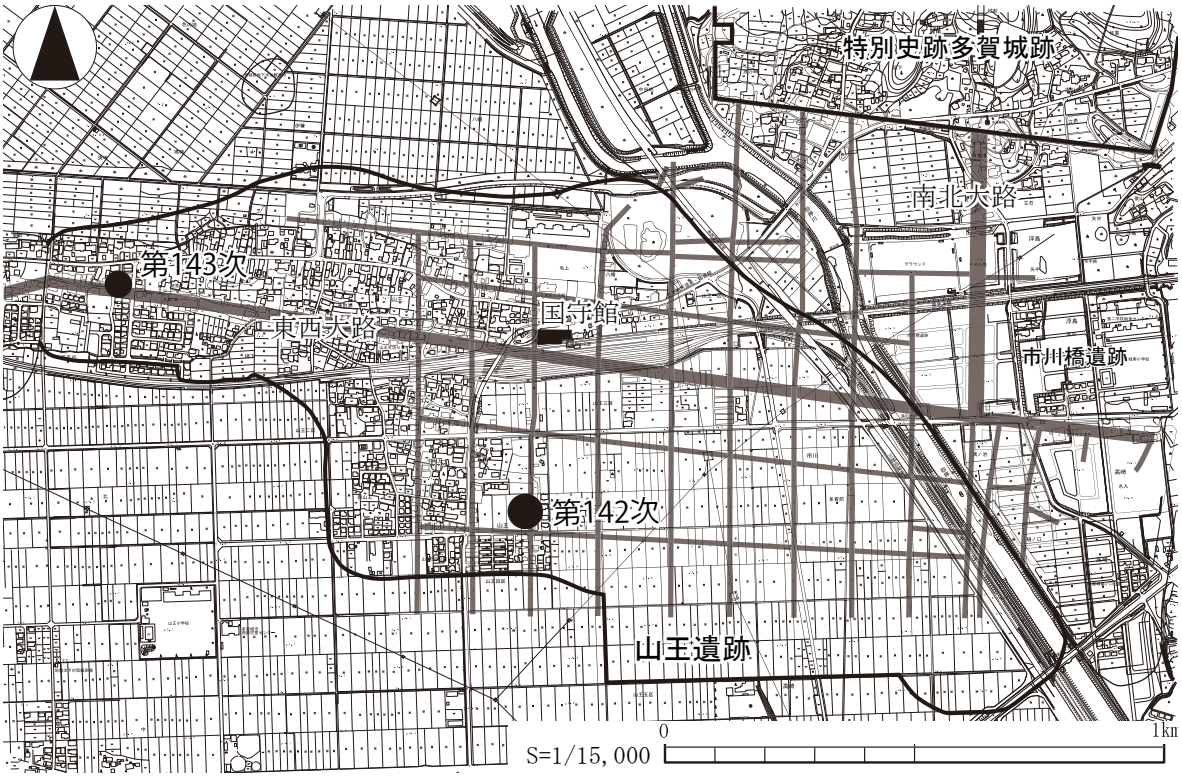
調査面積　　第 142 次調査：５７０㎡　　第 143 次調査：５４㎡

２　遺跡の概要

山王遺跡は、七北田川の東岸約１㎞付近から砂押川西岸にかけての微高地及び低湿地上に立地しています。東西約２㎞、南北約１㎞の範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積を有しています。

本遺跡では、これまで数多くの調査を実施しており、弥生時代の水田跡や、古墳時代の大規模な集落跡、平安時代の古代都市、中世武士階級の屋敷跡などが確認されています。

特に注目されるのは、平安時代に建設された古代都市です。多賀城に延びる南北大路と多賀城外郭南辺築地と平行する東西大路を基準に碁盤目状の道路網が段階的に整備され、９世紀中頃には南北 0.8㎞、東西 1.5㎞のまち並みが完成しました。東西大路沿いには「国守館」をはじめとする国司クラスの邸宅が立ち並び、それより１区画離れた場所には下級役人の住まいが設けられるなど、区画内で土地の選定が行われていたことが明らかになっています。今回報告の調査地は、東西大路の西端付近（第 143 次調査）と、南北大路から西側に数えて７本目の西７南北道路の南端に位置しています。いずれも山王遺跡の縁辺部にあたり、まち並みの中心部から離れた区画内の一端が明らかとなりました。



第１図　方格地割と調査区の位置

（１）第１４２次調査

発掘調査は、道路建設部分に逆Ｌ字状の発掘区（第１区）、開発区域内北端の擁壁建設部分に東西方向の細長い調査区（第２区）を設定して行いました。調査の結果、平安時代の西７南北道路を確認したほか、掘立柱建物跡や井戸跡、大小の溝跡などを発見しました。

西７南北道路は、第１・２区で東西の両側溝を検出しました。両区をあわせて南北約 20 ｍ分を確認し、さらに発掘区の南外側へと続いています。道路両側溝は、埋土の状況からいずれも新旧２時期（１期→２期）あることがわかりました。

道路の規模についてみると、２期の道路幅が溝心々間距離で約 5.2 ｍ、路面幅が約 2.9 ｍあります。１期は溝の最深部を溝心とすると、道路幅は約 7.4 ｍです。路面上は舗装等の痕跡はなく、暗灰黄色砂質土が堆積するのみです。この層を除去すると、性格不明の不整形な土壙が数基確認されました。

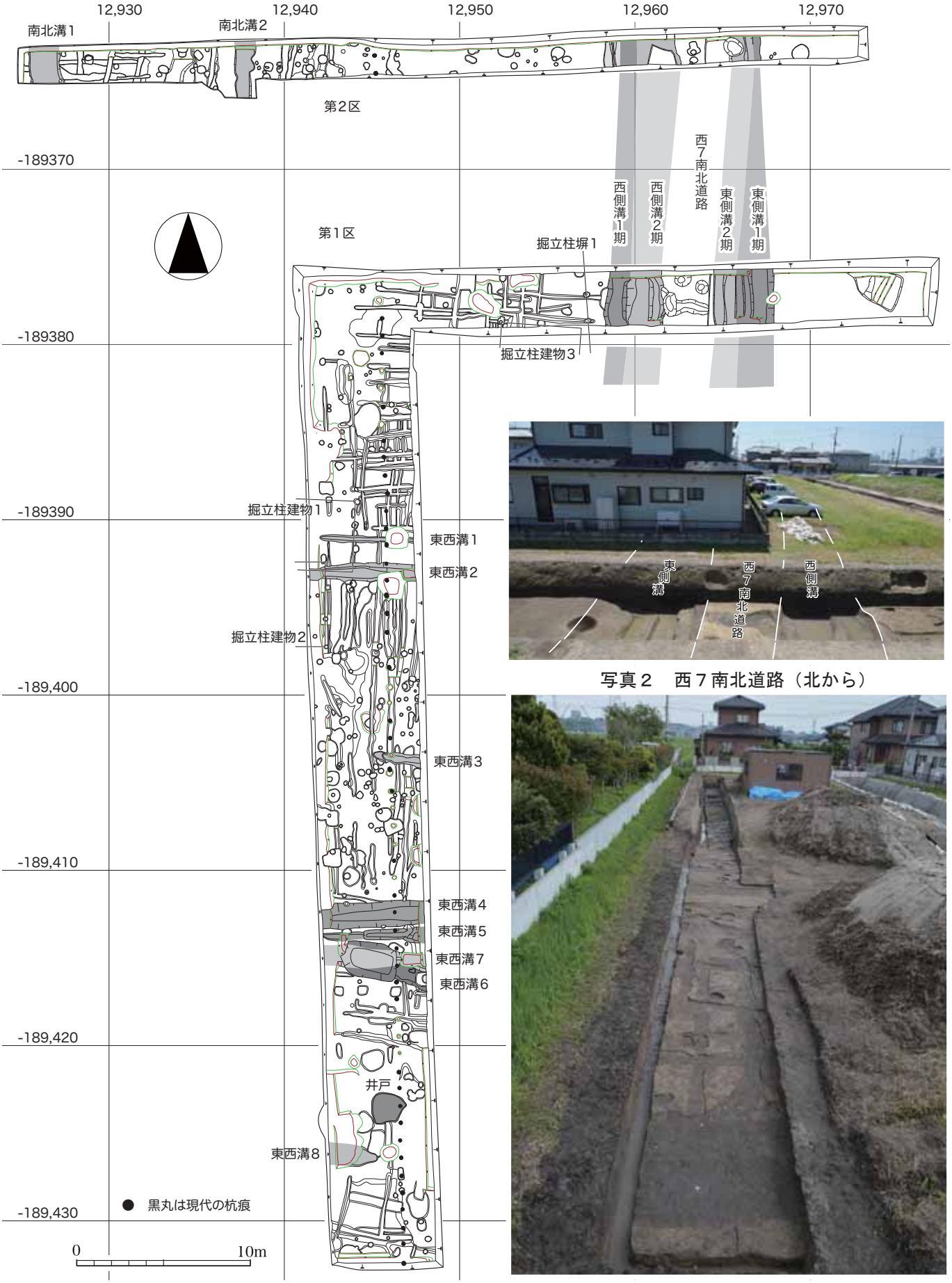
西側溝は、１期の溝の東側を壊して２期の溝が築かれています。２期の溝が幅約 3.0m、深さ約 0.75 ｍ、１期の溝が幅約 1.1m 以上、深さ約 0.6 ｍです。

東側溝は、１期の溝の西側を壊して２期の溝が築かれています。２期の溝が幅約 2.8m、深さ約 0.75 ｍ、１期の溝が幅約 2.1m 以上、深さ約 0.8 ｍです。

両側溝とも埋土は黒褐色粘質土が主体で、２期の埋土には灰白色火山灰（915 年降下）が含まれています。側溝からの出土遺物には、土師器・須恵器等の土器類の他、少量の獣骨（馬の歯か？）があります。また２期の西側溝からは、細蓮弁文軒丸瓦（多賀城跡 310 Ｂ型式）が出土しています。これらのことから、２期の両側溝が 10 世紀前半頃のもの、１期がそれ以前ものと考えられます。

また、北側隣接地の発掘調査（山王第 52・54 次調査）でも西７南北道路が検出されており、Ａ～Ｃ期の３時期あることが判明しています。位置関係と年代からみて、今回の１期が北側の調査のＡまたはＢ期に、２期がＣ期にあたると考えられます。

写真１　第１区全景（北西から）



第２図　調査区平面図（1/300）

写真２　西７南北道路（北から）

写真３　第２区全景（西から）

西７南北道路西側では、古代の掘立柱建物・井戸・土壙・溝・素掘小溝群があります。掘立柱建物は３棟が復原できましたが、いずれも調査区外に延びるため全容は不明です。柱穴の掘方規模から判断すると、小規模な建物と考えられます。またこれ以外にも組み合わない柱穴が多数あり、さらに数棟あったことが推定されます。

井戸は一辺約 1.2 mの方形の掘形を持つ素掘りのもので、深さは約 0.8 mありました。出土遺物がなく詳細な時期は不明です。

溝は、第１区で東西方向のものを８条、第２区で南北方向のものを２条検出しました。

西７南北道路東側は、調査範囲が狭く土壙２基を確認したのみです。しかし調査地の東南側隣接地の発掘調査（山王遺跡第 34 次調査）では、古代の掘立柱建物や土壙等が検出されており、宅地として利用されていたことがわかっています。

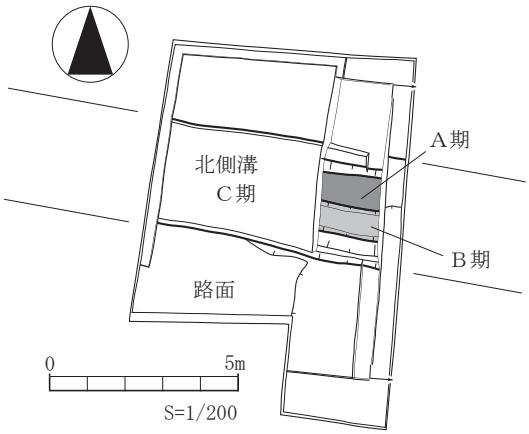
今回の発掘調査では、西７南北道路を確認し、その東西に広がる宅地の様相の一部が明らかになりました。西７南北道路は、今回の調査を含め４箇所の調査区で確認しており、今回の調査地が最も南側に位置しています。東西大路から南へ約 300 m離れた今回の調査区では、古代都市の縁辺部の様子を考える上で貴重な資料となりました。

写真４　第１区中央の柱穴と素掘小溝群（北東から）

（２）　第１４３次調査

東西大路の路面と北側溝を確認しました。外郭南辺築地と平行する東西大路では、最も西側で確認したものとなります。道路側溝の状況から３時期の変遷（A→C期）があり、B期側溝埋土に西暦 915 年に降下した灰白色火山灰が二次堆積していました。規模はC期で測ると路幅が 4.3 m以上、北側溝は幅約３m、深さ 0.5 mです。年代はA期が 10 世紀前葉以前、B・C期が 10 世紀前葉以降のものと考えられます。

なお、方格地割内で確認される東西大路は、８世紀後葉頃まで遡ることが明らかとなっていますが、今回の調査区内では確認されませんでした。



第３図　遺構配置図

写真５　東西大路（西から）

中央部に大路北側溝があり、路面は写真右側に広がっている。

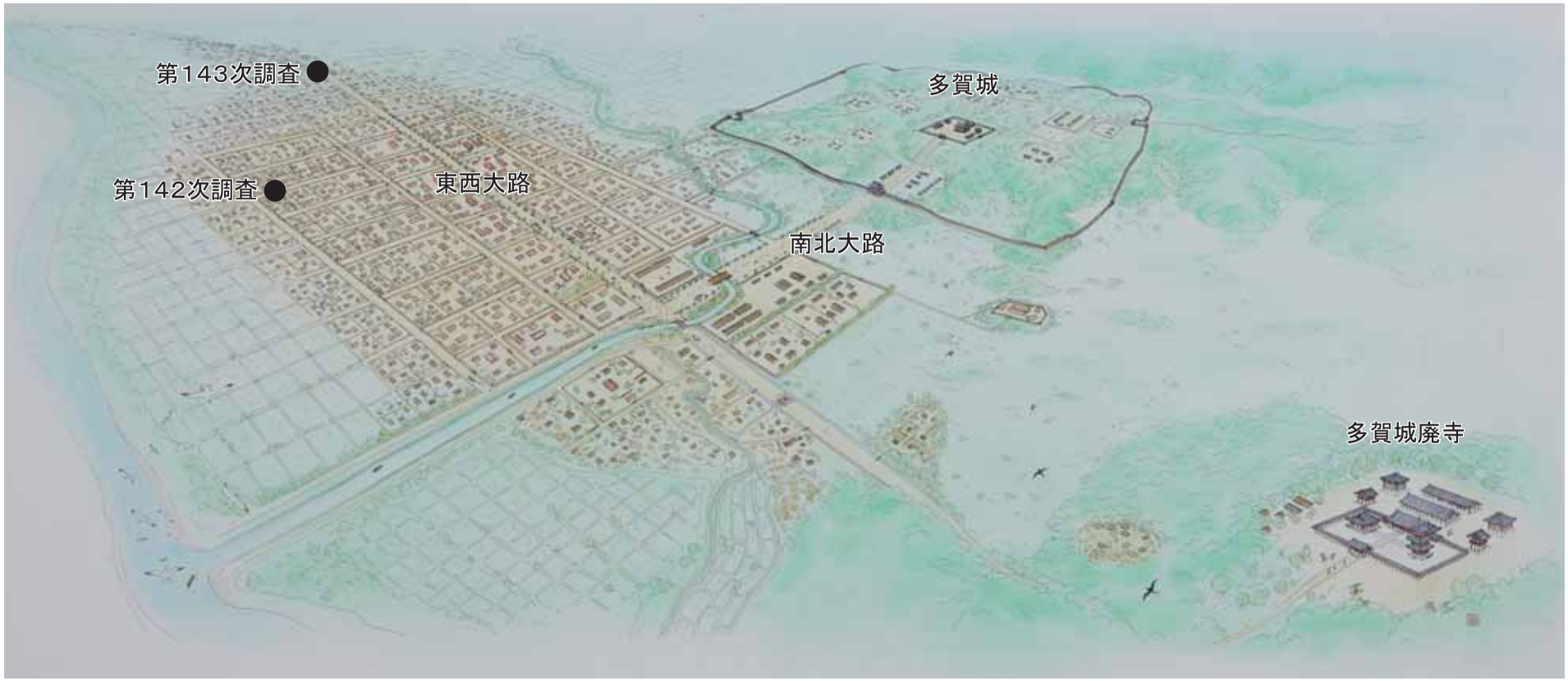


イラスト　早川和子

平安時代の都市の様子

多賀城南面には、道路によって区画された「方格地割」が施行されていました。地割内をみると、東西大路沿いには国司クラスの屋敷が設けられ、そこから1区画離れた場所は下級役人等の住まいであったと考えています。